

オーストラリアの解の公式

嶋田義皓 東京都

「地球が丸いことを知りたければ、オーストラリアで夜空を見るといい」

ある日の授業中、数学の津山先生がつぶやくようにそう言った。高校生の私には、何のことだか全然分からなかった。何かの聞き間違いかとも思ったけれど、そうじゃない。知っている単語だけを知っている文法で紡いだ言葉なのに、全体では意味不明なのだ。

a も b も c も、足し算もかけ算も分数も二乗も平方根も知っているというのに、結局意味がよく分からなかった、あの解の公式とどこか似ている。きっと、解の公式を知らなくても生きていける、とその頃は思っていたせいもあったのかもしれない。

X イコール二 a 分のマイナス b プラスマイナスルート b 二乗マイナス四 ac。地球が丸いことイコールオーストラリアデヨヅラヲミルコト。

でも、社会のルールとは違う数学のルールは、何千年も前からひっそりとそこにあり、訪れる人をただじっと待っているだけなのだ。意識してもしなくても、それはただそこに在り、ときおり訪れる人を少しだけ楽しませる。

夜空の星も同じかもしれない。

そもそも、地球が丸いことを知りたいなんて今時誰が思うだろう？ 世界はぐるりと一周できることは小学生でも知っている。かつて極東と言われていた島国だって、その国の世界地図では東の隅ではなく真ん中に描かれている。もはや地球が丸いことを疑う余地は、1 ミリだってない。

地球が丸いことも、解の公式や夜空の星と同じ「訪れる人を待っている存在」のなかまだ。初めて見つけた時代には大騒ぎだったろうけど、ブームは去った。今や誰も気にしてなんていない。みんなが気にしないということが、みんなが認めたということでもあるわけだ。

でも、いつ誰から地球が丸いことを最初に教えてもらい、ストーンと腑に落ちるのはいつ頃だったか覚えていない。確か、幼稚園、いや、小学校のしかも高学年に上がってからのような気もする。結局のところ、いつの頃からか証明というズルで安心を買うようになるのだ。

沖に向かう帆船が少しずつ水平線に沈んで見えなくなる。地球の影が月に映る月食を見ると丸い形が見える。万有引力で粒子が引き合うと、最後は球体になって安定する。証明は窮屈なほど一分の隙もない。でもクロスワードパズルは、答えを知ってしまった後からは、絶対に楽しめない。私たちの多くは、人に教えられた答えを頭書き込んで、地球が丸い実感のないまま生きる。

大学3年生の夏休みに、オーストラリアに行くことになった。もちろん、正確には、夏なのは日本だけで、南半球のオーストラリアは反対の冬だった。行ったことはなくとも、それくらいは知っていた。カンガルーがたくさんいて、その多くが交通事故で死ぬ国。台風の巻き方も水洗トイレの渦も日本とは真逆の国。と、そんなイメージだ。

東京では見られない星がオーストラリアの夜空で訪れるのを待っていることも、知っていた。けれど、津山先生が言っていた言葉は、とうの昔に忘れていた。オーストラリアに来たのも、短期の語学研修のために、地球は丸いかどうかなんて確かめに来たわけじゃなかった。

ノースランボルンという名の町が1ヶ月のあいだの地元となった。世界一住みやすい街と評されるメルボルンまで電車で1時間の郊外の町にあるホストファミリーの家から、海沿いの町フランクストンにある研修先の大学までバスで通った。

夜になると、ホストマザーとホストファザーは庭に出て、南十字の位置を分かりやすく教えてくれた。2人は星空に詳しいわけでもなんでもないが、見上げるとすぐに十字架で結ばれる4つの星を見つけられた。きっと、東京では見ることができないその星座を、これまで何度となく日本人留学生に尋ねられたからだろう。慣れたものだった。

生まれて初めて見る南十字は、東京で見るとどの星座とも似ていなかった。全天でもっとも狭い領域に、とびきり明るい1等星をふたつもちりばめた贅沢な星座は、東京の夜空で4つの星を結んでも作れない。いつもと違う夜空が、ここが今までとは違う場所だと教えてくれる。大昔の船乗りと同じ方法すぎるのが、くすぐったかった。

ひときわ明るく輝くアルファケンタウリは、私たちから二番目に近い距離にある星だ。一番目はもちろん太陽だ。けれど、夜空で無数に煌く星と、昼間に無尽蔵に地球を照らす太陽とが、同じ恒星のなかまだと最初に言った天文学者は誰だったか。夜空の星はどう見ても太陽とは違う。同じだと言われてもそう簡単には納得できない。私たちは地球の丸みと一緒に、窮屈な証明をどこかで鵜呑みにすることに味を占めてしまったようだ。それでも、気さくな南十字は何千年も前

からそこに在り、今も昔も変わらず訪れる人を楽しませることを忘れていない。

見上げた夜空には、無数の恒星が輝く。みんな太陽と同じなら、私たちの住む地球のような惑星もきっとどこかの太陽の周りを回っているんだろう。別の太陽の周りを回る別の地球の別の知的生命体が、きっと太陽が明るく輝くのを見つけてくれる。それはアルファケンタウリのように明るくは見えなかもしれないけれど、何座の星と呼んでいるのだろうか。私たちがそれを知ったとき初めて、何千年も訪れる人をひっそりと待っている南十字の気持ちを汲んでやれるだろう。

くだんの「地球が丸いのを云々」という言葉を思い出す機会は、あるとき急に訪れた。

オーストラリアでの語学研修とホームステイも半ばを過ぎて、ビューティー山のふもとのある小さな町を訪れたときのことだ。そこはオーストラリアでも有数のスキーリゾートであるピクトリアンアルプスの一角にあり、済んだ冬の夜空を見るための隠れたメッカだと後で知った。

人間の作る光の少ないその小さな町では、夜空はむしろ明るい。夜空が暗ければ暗いほど、夜空は多くの星でどんどん明るくなる。電球のフィラメントが放つ激しくて暖かな光とくらべ、夜空の星が放つ黒体放射の冷たさは、冬の気温をよりいっそう身にしみさせる。

見知らぬ連中ばかりだと思っていた空で、見慣れた星座を見つけた瞬間、口からこぼれた。

「あ、地球って丸いんだ」

突然のことだった。自分でも何を言ったか意識するかしないかの間だ。あっという間の刹那に、「あっ」と言う間なんてない。日本で見るのとは逆さまにそびえ立つオリオン座。それは、たった一瞬の間に、すべてのことを論理立てて説明するのに十分な緻密さをもった証明だった。三つ星の傾き方を覚え間違ったかと思うのは錯覚で、オリオンではなく自分が逆さまなのだと思うと、すべてがストーンと腑に落ちる。自分が逆さまに地球に乗っかっているから、オリオンが逆さまに見えるのだ。地面に寝転ぶと状況はさらに深刻だ。そもそも私が地球に乗っているのではない。地球が私に乗っているのだ。オーストラリアにいるこの瞬間、私は日本にいるときとは上下逆さまで地球に張り付いていた。

星空を見上げることは、私の立っている場所がどこなのかを知ることだ。高性能の望遠鏡連中がハワイの山頂からギリギリと宇宙をにらみつけている今も、船乗りが六分儀を使って航路を決め

ていた時代となにも変わらない。

自分のいる場所のことを知るためには、よく目を凝らさなければならない。それは隠されているわけじゃないけれど、とてもひっそりと存在しているから。訪れる人をじっと待っているけれど、当たり前すぎて気づきにくいから。それらは、自分自身で体験してはじめて、自分のものになる。

オーストラリアの夜空を見ることは、ちゃんと地球が丸いことを知るための体験だった。解の公式もひっそりと佇むだけでなく、こうやってみごとに証明する道が辿ればよいのに、と思う。

「地球が丸いことを知りたかったら、オーストラリアの夜空をみるといい」。今度は私が誰かに使う番だ。